

厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学総合研究事業）  
（分担）研究報告書

自殺の危険因子としての解離状態・解離性向についての研究

帝京大学医学部附属溝口病院精神科  
科長・助教授 張賢徳

抄録

自殺の危険因子の候補として、個別事例の研究から、解離性向を見出した。本研究では、この仮説を検証するために、患者集団の解離性向（DES 得点）と自殺未遂歴の関連を調べた。うつ病患者において、自殺未遂者の解離性向は非未遂者のそれより高く、解離性向の強さが自殺行動の危険因子の 1 つであることが示唆された。他の精神科疾患群でも同様の結果が得られる可能性があり、今後の研究につなげたい。

<背景>

精神疾患自体が自殺の危険因子として重要であるが (Cavanagh ら 2003)、一方で、同じ診断カテゴリーにある患者が全て自殺するわけではない。例えば、自殺の危険因子としてうつ病はよく知られているが、中等度以上のうつ病での自殺率は 10%～15%といわれている。何が自殺する人とそうでない人を分けるのであろうか。筆者はこの点を解明するために、自殺未遂者に聞き取り調査を行った結果、自殺行為時の状態として、次の点に着目した—自殺行為直前の自殺念慮の強い高まり、自殺することしか頭にない興奮状態、自殺行為時の健忘、後に健忘を残すがその時には目的遂行型の行動（すなわち自殺行動）を行う。そして、感情（自殺念慮）の強い高まり、興奮状態、行為時の健忘、目的遂行型の自動行為という成分を結びつける概念として、筆者は解離状態に思い至った（張ら 1999）。

そこで、筆者は自殺行為の最終段階について、次の 3 つの仮説を立てた。

- (1) 自傷行為中には解離状態が生じている。
- (2) 自傷行為中の解離状態が強いほど、自傷による身体重症度は重い。
- (3) 解離状態への親和性（解離性向）が強いほど、自傷行為を起こしやすい。

仮説(1)の検証は、自殺未遂者に自傷行為時のことを想起してもらい、Peritraumatic Dissociative Experiences Questionnaire (PDEQ) (Marmar ら 1994) で評価する。仮説(2)は、自殺未遂による身体重症度を 4 レベルに分類し、PDEQ 得点を比較することによって検証する (PDEQ は高得点ほど解離状態が強い)。仮説(3)では、解離性向が Dissociative Experience Scale (DES) (Bernstein ら 1986) で測定できることを前提に、自殺未遂群と自殺未遂歴を有さない群で DES 得点を比較する (DES は高得点ほど解離性向が強い)。

これらの仮説を検証する予備的調査では、仮説を支持する結果が得られた（張ら 1999）。

なお、本研究は帝京大学医学部倫理委員会の承認を得て行われた。

#### <目的>

うつ病患者において、解離性向と自傷行為の関係を DES 得点を用いて調べる。

#### <対象>

平成 16 年 10 月 1 日～30 日に帝京大学医学部附属溝口病院精神科を受診した大うつ病患者で、本研究に対して同意が得られた 51 名が対象である。

#### <結果>

対象 51 名（男性 27 名、女性 24 名）中、16 名（男性 9 名、女性 7 名）に自殺未遂歴があった。この 16 名の自殺未遂群と、残る 35 名の非自殺未遂群の DES 得点を比較した結果、自殺未遂群（mean score=15.17, SD=10.72）と非未遂群（mean score=7.46, SD=9.45）で、未遂群の方が有意に高かった（Mann-Whitney test,  $z=2.76$ ,  $p<0.01$ ）。なお、未遂群の平均年齢は 44.3 歳（SD=12.4）、非未遂群は 54.3 歳（SD=15.4）で前者の方が有意に若かった（ $p<0.05$ ）。

#### <考察>

うつ病患者において、自殺未遂群の DES 得点が高かった。これは、「解離状態への親和性（解離性向）が強いほど、自傷行為を起こしやすい」という仮説を支持する所見と考え得る。しかし、今回の結果

においては、自殺未遂群の年齢が有意に若いことから、DES 得点に対する年齢の効果を考慮せねばならない。一般に、年齢が若いほど DES 得点は高いといわれており、これを考慮すると、今回の結果の意義は限定的である。

#### <結語>

結果は暫定的であるが、自殺行動には解離仮説に合致する一群があると考えられる。解離という概念を導入することによって、従来指摘されてきた自殺行動の成分（中間の表現型）の統合が図れる。不安焦燥は強い自殺念慮の高まりに相当し、これが解離を惹起すると考えられる。解離は強い情動反応で誘発されることが知られている（van der Kolk ら 1989）。解離状態になると自己の認識の領域外で思考や行動が起こるといわれているが（Kihlstrom ら 1993）、この自己コントロール喪失の状態では、解離状態直前の意志を実行する。解離性向が強いと解離状態に陥りやすく、すなわち自己コントロールを失いやすい。これが衝動性といわれてきたものではないだろうか。攻撃性は衝動性に関係していると思われる。すなわち、解離状態の引き金が攻撃性を伴う情動であった場合、容易に解離状態に陥ること（＝衝動性）が、攻撃性を発現しやすいと解釈されてきた可能性がある。自殺の場合には、解離状態の引き金が自殺念慮を伴う情動というわけである。これから類推されることは、自傷にせよ他害にせよ、いわゆる衝動行為と言われてきたもの全般に解離が関与している可能性である。結果が自傷になるか他害になるかは、解離直前の意志による。

この解離仮説は、精神科診断横断的に当てはまると考えられる。これを検証するためには、今後、対象を拡大して調査する必要がある。

最後に、解離仮説に関するまとめを提示する。

#### 解離仮説のまとめ

- ・ 解離性向の強い者に自殺念慮が生じた時に自殺の危険が高まる(強い解離性向 + 自殺念慮が自殺の危険因子の1つと考えられる)。
- ・ 自殺念慮の生起には解離性向は関係しない。
- ・ 自殺行動の一群は以下を満たす。
  - (1) 自傷行為中には解離状態が生じている。
  - (2) 自傷行為中の解離状態が強いほど、自傷による身体重症度は重い。
  - (3) 解離性向が強いほど、自傷行為を起こしやすい。
- ・ 自殺を考えさせる特定の心理的要因があって、死ぬ覚悟が強い場合の自殺行動は解離性向に関係する度合いが低い。
- ・ 自殺行動の中間的表現型(不安焦燥、衝動性、攻撃性)の意味は解離概念で包括的に理解できる。
- ・ 解離と自殺行動の生物学的共通点はセロトニン系異常である。

#### 文献

Bernstein EM, Putnam FW: Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *J Nerv Ment Dis* 174: 727-735, 1986

Cavanagh JTO, Carson AJ, Sharpe M, et al: Psychological autopsy studies of suicide: a systematic review. *Psychol Med* 33: 395-405, 2003

張賢徳, 竹内龍雄, 林竜介, 他: 自殺行為の最終段階についての研究: 「解離」仮説の提唱と検証. *脳と精神の医学* 10: 279-288, 1999

Kihlstrom JF, Tataryn DJ, Hoyt JP: Dissociative disorders. In: Sutker PB, Adams HE, ed. *Comprehensive Handbook of Psychopathology*. Plenum Press, 1993

Marmar CR, Weiss DS, Schlenger WE, et al: Peritraumatic dissociation and posttraumatic stress in male Vietnam theater veterans. *Am J Psychiatry* 151: 902-907, 1994

van der Kolk BA, van der Hart O: Pierre Janet and the breakdown of adaptation in psychological trauma. *Am J Psychiatry* 146: 1530-1540, 1989